

# ブリーフィング・ドキュメント：不登校支援における「人を活かす」視点と実践

本ドキュメントは、不登校支援コミュニティ「ハートスクール」の副代表であり、キャリアコンサルタントやコーチとしても活動する導師真ショウ（どうしょう）氏へのインタビュー内容に基づき、同氏の支援哲学、経験、および対人支援の本質をまとめたものである。

## 1. エグゼクティブ・サマリー

導師真氏は、10年以上のスポーツ指導、南アフリカでの青年海外協力隊経験、そしてキャリアコンサルティングの知見を融合させ、「個別の最適解」を追求する支援スタイルを確立している。同氏の哲学の核心は、ステレオタイプを排した「個別化（Individualization）」と、人間のポテンシャルを最大限に引き出すための「徹底的な観察」にある。不登校支援において「万能薬」は存在しないという前提に立ち、支援者が思考を止めず、対象者にとっての「良い人生」を共に問い続ける姿勢の重要性を強調している。

## 2. 導師真ショウ氏のプロフィールと専門性

導師真氏は、複数の領域で「人を育てる・活かす」活動を展開している。その背景には、幼少期からのゲーム体験や大学での研究、海外経験が深く結びついている。

| 領域     | 活動内容・資格                                |
|--------|----------------------------------------|
| 不登校支援  | オンラインフリースクールでの支援、ハートスクール副代表            |
| コーチング  | 10年以上のスポーツコーチング（小学生バスケットボール）、ビジネスコーチング |
| キャリア支援 | 国家資格キャリアコンサルタント（元ハローワーク相談員）            |
| 国際協力   | 青年海外協力隊として南アフリカに2年間派遣（外務省プログラム）        |

## 3. 核心となる哲学：多様性と個別化

導師真氏の支援の根底には、南アフリカでの経験から得た「多様性」への深い理解がある。

## ステレオタイプの打破

- 「人」として見る: 南アフリカでの生活を通じ、人種、年齢、村といった属性に関わらず、一人ひとりの価値観や考え方は全く異なるという事実と直面した。
- 万能薬の否定: 「不登校の子にはこうすればいい」といったマニュアル的な支援を強く否定する。不登校という文脈であっても、一人ひとりに合わせた個別の関わりが必要であると説く。

## 最適解のカスタマイズ

- 情報のマッチング: 現代は情報が溢れており、理論や正解は出尽くしている。支援者の役割は、その膨大な素材の中から、目の前の相手が「食べやすい形(漫画、小説、対話など)」にカスタマイズして提供することにある。
- ゲーム的思考の応用: 幼少期からのカードゲーム(シャドウバース、ポケモン等)の経験から、環境や相手に合わせて自分の中の最適解を導き出す「攻略」のプロセスが、現在の対人支援にも一貫して流れている。

## 4. 支援における実践的手法

具体的な支援現場において、導師真氏が重視している視点は「観察」と「人間理解」である。

### 徹底的な観察(センサー能力)

- 非言語情報の収集: 言葉尻だけでなく、表情、手の動き、声のトーンの変化、チャットの返信速度などを細かく観察する。
- 「熱量」のサーモグラフィー: 対象者が何に興味を持ち、どこで熱量が上がるのか(例: ゲームのプレイ自体なのか、友人との交流なのか、上達なのか)を注意深く見極める。
- 実験的アプローチ: 自身の働きかけ(言葉かけ)を一つの「実験」と捉え、それに対する相手の反応を見て次のアプローチを修正していく。

### 人間としての普遍的な喜びへの回帰

- 自己効力感の醸成: 人間が生きる原動力となる「自分にはできる」という感覚(自己効力感)を重視する。
- 「良い人生」の定義: 抽象的で曖昧な「良い人生」「良い人間」という言葉を大切にし、その子にとっての「良さ」とは何かを科学的・哲学的な視点を交えて模索する。

## 5. 自己研鑽と支援者のマインドセット

導師真氏は、自身を「ネガティブ」と称しながらも、それを成長のエネルギーに転換している。

- 肯定的ネガティブ: 「これで本当にいいのか」と常に自分自身を疑い、前提を問い直すストイックな姿勢を持つ。この自己否定が、より質の高い支援や新しい学び(AI活用など)へのモチベーションとなっている。
- バランスの保持: 自分の良いところを認めつつ、同時に否定もする「両取り」の状態、人間としてのまとまりを目指している。

## 6. AI時代における対人支援の展望

AI(人工知能)が理論や理屈、メンタルケアの一部を担うようになる未来において、人間の支援者に残る役割を以下のように考察している。

- 意思決定と選択: 膨大な選択肢から「何を選び、何をやめるか」という最終的な決断を下すプロセスには、依然として人間の介入が必要である。
- 「生きる」ことへのコミット: AIのレコメンドに従うだけの人生ではなく、苦しみや葛藤を含めて自分で選択することこそが「生きる」ことであり、そこに伴走するのが人間の支援者の価値である。

## 7. 結論: 支援者に課せられた「呪い」と覚悟

ドキュメントの締めくくりとして、導師真氏が自身に課している、そして全ての支援者に贈るメッセージを記す。

「指導者・支援者が諦めたら、そこで終わりである」

これは導師真氏にとって「呪い」のように強く刻まれている言葉である。支援者が面倒に感じたり、絶望して思考を停止したりした瞬間に、その子への支援の道は閉ざされる。自分一人で解決できない場合は専門家につなぐことも含め、「諦めずに考え続けること」こそが、支援者に求められる究極の誠実さであり、AIには代替できない人間の意志の力である。